-学会開催報告-

第19回日本母性看護学会学術集会

学術集会メインテーマ

ライフサイクルにおけるセクシュアリティ支援
～多様性の意識化と実践～

本間　裕子

（武庫川女子大学看護学部准教授・学術集会事務局長）

会 長 講 演「セクシュアリティ支援の多様性」
町浦 美智子（武庫川女子大学看護学部）
理事長講演「エビデンスに基づく高年初産婦への産後ケア」
森 恵美（千葉大学大学院看護学研究科）
特 別 講 演「夫源病からみた夫婦の関係性」
石蔵 文信（大阪大学人間科学研究科未来共創センター）
教 育 講 演「学校等におけるセクシュアルマイノリティの現状と支援」
日高 庸晴（宝塚大学看護学部）
シンポジウム「看護実践におけるセクシュアリティ支援の実際」
鈴木 久美　（大阪医科大学大学院看護学研究科）
藤井 ひろみ（神戸市看護大学看護学部）
三宅 知里　（独立行政法人労働者安全機構 大阪労災病院）
ランチョンセミナー
1）「姿勢と呼吸とペリネの理論とガスケアプローチが叶える生理的なお産」
宋 美玄（日本ガスケアプローチ協会）
2）「糖尿病と妊娠 Up to date」
和栗 雅子（地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪母子医療センター）
ナーシングサイエンスカフェ（高校生対象）「女性の一生に寄り添う助産師の仕事」
辻本 八千代（聖バルナバ病院）
母性看護 CNS 実践報告会 1 件、交流集会 1 件、一般演題（口演）22 件、
ポスターセッション 21 件

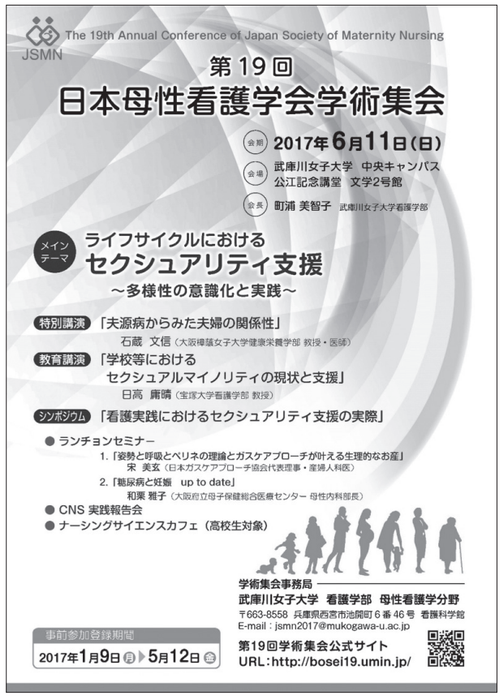
メインテーマ
「ライフサイクルにおけるセクシュアリティ支援 ～多様性の意識化と実践～」

2017 年 6 月 11 日（日）、町浦美智子教授を学術集会長として、第 19 回日本母性看護学会学術集会を本学中央キャンパスにある公江記念講堂および文学 2 号館にて開催いたしました。看護学部で開催する学術集会としては、第 15 回日本アディクション看護学会学術集会（心光，2017）に続き、2 度目になります。梅雨の時期ということもあり、天候が心配されましたが、幸い晴天の中、参加者の皆様をお迎えすることができました。これも阿曽洋子看護学部長が開会式で述べられていたとおり、阿曽学部長、藤原千惠子看護学科長、町浦学術集会長の「三大晴れ女パワー」のおかげでしょうか。

写真 1　開会式挨拶（阿曽洋子学部長）

日本母性看護学会は 1999 年に、女性・母子および家族の福祉に貢献することを目的に発足しました。母性看護とはその名称からも、「母性看護＝母親（妊産褥婦）と新生児・乳児の看護」と思い浮かべるかもしれません。確かに周産期看護に携わる看護職は多く、看護基礎教育カリキュラムでも、母性看護学の中で大きな位置を占めています。昨今、母性看護学においてリプロダクティブ・ヘルス／ライツと並ぶ重要な概念として「セクシュアリティ」や「セクシュアリティの多様性」が注目されています。今年度ほど、日常生活やメディアで「LGBT」（レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー）や「セクシュアル・マイノリティ（性的少数者）」という言葉に遭遇する機会はなかったでしょう。

多様なセクシュアリティに対する多様な支援を参加者の皆様と探求すべく、本学術集会のメインテーマを「ライフサイクルにおけるセクシュアリティ支援～多様性の意識化と実践～」としました。セクシュアリティとは単に性行動のみをさすものではなく、人間関係も包含した基本的な人権でもあります。その複雑性・多様性により理解が難しく、セクシュアリティに関する様々な課題をもつ対象者に対し、どのように援助すればよいか悩む看護職者も多くいらっしゃると思います。そこで、セクシュアリティをテーマとし、多方面から講師をお招きすることによって、1 日だけの開催ではありますが、皆様とともにセクシュアリティ支援を考える機会としたく、プログラムを企画しました。また、学術集会広報用チラシは多様性を表現するため、虹色を基調とし（写真は白黒ですが）、新生児期から老年期までの女性のライフサイクルを表すイラストを入れました。このイラストの女性も母親としてだけでなく、働く女性としての生き方も反映されるよう工夫しています。メインテーマや画像に込められた私たちの思いを読み取っていただければ幸いです。



チラシ

会長講演
「セクシュアリティ支援の多様性」

学術集会長の町浦教授による「セクシュアリティ支援の多様性」と題した講演の一部をご紹介します。まず、看護教育でセクシュアリティはどのように教えられてきたのかを振り返りました。セクシュアリティの学習は母性看護学より先に、精神保健に明記されました。その後、カリキュラム改変を経て、母性看護学のみならず、すべての分野で性に関することを学習するように編成されています。次に、性教育の変遷を紹介しました。学校における性教育は 1990 年前後から始まったとされます。性教育が「行き過ぎ」であると批判が強まった時期もありました。2015 年には文部科学省から「性同一性障害や性的指向・性自認に係る児童生徒に対するきめ細やかな対応等」に関する通知が出され、学校における多様なセクシュアリティの生徒に対する支援も始まりました。

セクシュアリティには複数の側面があります。身体的な側面だけではなく、心理社会的な面もあり、他者との人間的なつながりや愛情も含まれます。また、生殖性、快楽性、連帯性、親密性と 4 つの側面に分類する考え方もあります。いずれも、Calderon が「(セックスとは両脚の間（性器）にあるものだが 、）セクシュアリティとは、両耳の間（脳）にある」ものだと述べたように、人間として生きていく上で、関係性がとても重要であることを示しています。

セクシュアリティ研究の動向を概観すると、母性看護学・助産学分野の他に、がん看護学分野で増えています。乳がんや子宮がん患者、オストメイト、神経難病や知的障害、二分脊椎患者のセクシュアリティ研究がされていますが、援助の効果を検証する研究はまだ少ないようです。

セクシュアリティに関する課題に対して、看護職者の知識や時間不足、対象者の羞恥心や遠慮などがあり、充分な支援ができているとは言えません。まずは、何から始めればいいのでしょうか。この問いに対して町浦学術集会長はネットワークづくり、対象者がここなら安心して相談できると感じられる場所を設けること、悩みを受け入れる準備があることを伝えること、パートナー間や家族内でセクシュアリティに関するコミュニケーションを促すことが必要だと述べました。さらに、セクシュアリティ支援モデルの 1 つである PLISSIT（Permission, Limited Information, Specific Suggestion, Intensive Therapy）モデルを紹介しました。PLISSIT モデルは Permission（許可：相談に応じるというメッセージを出すこと）、Limited Information（基本的な情報の提供）、Specific Suggestion（個別の助言）、Intensive Therapy（専門家による集中的な治療）という 4 段階の介入から構成されています。専門的な高いレベルの知識やスキルが必要とされる段階もありますが、まずは最初の 2 段階の介入から始めてみてはどうかと提案しました。町浦学術集会長は最後に、「私たちは性的な存在であるということを忘れずに、このセクシュアリティの視点を採り入れた看護援助をするということを常に心がけていっていただければ」というメッセージで、講演を締めくくりました。

写真 2　会長講演（町浦美智子教授）

理事長講演
「エビデンスに基づく高年初産婦への産後ケア」

日本母性看護学会理事長の森恵美先生（千葉大学大学院教授）には、「高年初産婦に特化した産後 1 か月までの子育て支援ガイドライン」（森ら，2014）開発の経緯、ガイドラインの概要、その実用化に向けた検証の過程をお話していただきました。少子化、晩婚化、晩産化が進む現在、高年初産婦（35 歳以上で初めて母親となった女性）の割合は 1 割を超えています。産後の入院期間が短縮される傾向にあり、特に高年初産婦では産後の回復の遅れや育児不安が懸念されま

す。そこで、産後の女性に提供される標準的な看護ケアに加え、高年初産婦に特化したケアが必要になります。森先生らの研究グループはシステマティック・レビュー、支援ニーズの明確化、そのニーズに対応した看護ケアの提示、外部評価を経て、本ガイドラインを作成されました。次いで、ガイドラインに則った看護を現場で適切に実施されるよう、研修会も開催されました（青木，森，坂上，岩田，前原，土屋，岡村，2016）。

医師が作成する診療ガイドラインとは異なり、看護ガイドラインでは個別な状況をいかに取り入れたものにするかが重要である、と森先生は話されました。ガイドライン開発にあたっては希望や価値、個別な身体的、心理社会的状況を取り込むこと、個人の尊厳や権利を保障して擁護することを大切にされたそうです。私たちもこのガイドラインをもとに、（森先生のお言葉を借りて言えば）「その人なりに、楽しく快適に母親になる」ことを援助していきたいものです。

特別講演
「夫源病からみた夫婦の関係性」

母性看護やセクシュアリティ支援の対象は女性だけではありません。また、町浦学術集会長の講演でも強調されていたように、セクシュアリティには人と人との関係性も含まれます。特別講演の講師として「夫源病」の命名者であり、男性更年期外来を開かれている医師の石蔵文信先生（大阪大学人間科学研究科未来共創センター）をお招きし、更年期の夫婦関係の問題と健康への影響についてお話していただきました。

写真３　特別講演（石蔵文信先生）

「夫源病」とは夫が原因で妻の体調が悪くなることです。長年、更年期症状に悩む妻を夫と一緒に診療したら、短期間で軽快することがあるのだそうです。愛媛県の高齢者を対象とした調査で、夫がいる女性はいない女性と比べて死亡リスクが２倍であったのに対し、妻がいる男性ではいない男性に比べて死亡リスクが 0.5 倍だったという結果も紹介されました。他の調査では、老後は妻と共通の趣味をもち、家でのんびり過ごしたいと考えている男性が多い一方、女性はお互いに干渉せず、夫には自分の世話は自分でしてほしいと考えていることが多いなど、夫婦のすれ違いが明らかになっているそうです。

夫が定年後、うつ状態に陥ったり、妻のストレス源になったりすることなく、夫婦ともに健康に過ごすためには、「主人」「旦那」「亭主」と言われてきた夫が、妻を一個人として対等に接することが大事だと石蔵先生は述べられました。まずは妻を「おまえ」や「おかあさん」ではなく、名前を呼ぶことがいいそうです。さらに、男性も家事能力を身につけ、自分の世話ができるようにすることも大事で、石蔵先生は男性のための料理教室を開催されています。

ご自身の臨床経験に、最新の研究結果とユーモアをふんだんに交えたお話から、女性あるいは男性個人だけでなく、パートナー関係もアセスメントし、介入していく必要性を伝えていただきました。更年期の夫婦に対する看護のみならず、これから新しい家族を作っていく時期である周産期の看護にも生かせそうです。

シンポジウム
「看護実践における
セクシュアリティ支援の実際」

メイン会場の公江記念講堂で行われた最後のプログラムはシンポジウムで、３名の講師の先生方の専門領域におけるセクシュアリティ支援についてお話していただきました。まず、藤井ひろみ先生（神戸市看護大学看護学部）は、多様な性を理解するときには LGBT より SOGIE、すなわち Sexual Orientation（性指向）、Gender Identity（性自認）、Sexual Expression（性表現）の方が便利だろうと述べ、これら３つの用語について解説されました。われわれ看護職者は様々な SOGIE の人々を対象としていますが、必ずしもマイノリティの立場にある人々が安心して医療を受けている状況ではありません。藤井先生が提案されたように、多様なジェンダーや性指向に対する態度は柔軟だろうか、セクシュアル・マイノリティに対して支持的な言葉を使っているだろうかと意識しつつ、すべての人々が安心・安全に医療を受けられるような環境を作っていく必要があるでしょう。

がん看護学の専門家である鈴木久美先生（大阪医科大学大学院看護学研究科）は、町浦学術集会長の講演でも紹介された PLISSIT モデルに基づいて、乳がん女性のセクシュアリティを支える援助についてお話されました。セクシュアリティに関する相談を受け付けるというメッセージの発信や、潤滑ゼリーの購入法・使用法のような具体的な情報の提供に加え、必要な場合にはがん看護専門看護師（CNS）や乳がん看護認定看護師により、専門的かつ個別的なケアが行われています。関係性に注目することも重要で、パートナーとの関係の支援の他にも、告知の問題も含めて、がん患者の子どもへの援助が今後の課題だそうです。また、乳がん患者会の世話人もされている鈴木先生は、乳がん体験者と協働することも、女性性や自分らしい生活・人生を取り戻す上で重要とも述べられました。

三宅知里先生（独立行政法人労働者健康福祉機構 大阪労災病院）は、母性看護 CNS の立場でセクシュアリティ支援をされています。がんを持つ女性の生命と妊孕性の両方を守るため、外来でがん告知の段階から介入し、妊孕性を温存するための治療法の利点と欠点などを説明されているそうです。産科医、乳腺外科医、乳がん看護認定看護師らと協働し、乳がん治療と妊娠継続を両立させた事例を紹介してくださいました。「出産はすごくまぶしい、素晴らしいものであるが、それを諦める分、影も大きい。母性看護 CNS として、光が当たらないところでも光を当てていくようなセクシュアリティ支援を今後もしていきたい」という締めの言葉が印象的でした。

その他の多彩なプログラム

本学術集会のメインテーマにもある「多様性」は、プログラムと講師陣にも表れています。教育講演では、セクシュアル・マイノリティ研究の第一人者である日高庸晴先生（宝塚大学看護学部）が、セクシュアル・マイノリティ生徒のいじめ被害や不登校、自殺などの問題とその支援についてお話されました。ランチョンセミナーにはメディアでも活躍されている産婦人科医の宋美玄先生（日本ガスケアプローチ協会）と、内科医として長年、糖尿病、甲状腺疾患などの内科合併症や、妊娠高血圧症などの妊娠合併症をもつ妊婦を診療されている和栗雅子先生（地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪母子医療センター）をお招きしました。宋先生には「ガスケアプローチ」という姿勢と呼吸から骨盤底筋群に働きかける身体的アプローチを活用した分娩、和栗先生には糖尿病と妊娠に関する最新の知見を紹介していただきました。

写真４　ランチョンセミナー（宋美玄先生）

写真５　ランチョンセミナー（和栗雅子先生）

日本母性看護学会学術集会では例年、母性看護 CNS による実践報告会が行われています。今回の学術集会でも、3 名の CNS がそれぞれ臨床実践で関わった母体疾患合併、胎児疾患合併、社会的ハイリスク事例を発表されました。実践報告会に先立って行われた交流集会「母性看護専門看護師育成の現状と課題」と合わせて報告会は盛況で、CNS による実践に対する関心の高さがうかがわれました。

写真 6　母性看護 CNS 実践報告会

学会員による研究発表は口演 22 題、ポスター 21 題の計 43 題でした。文献検討から実践報告まで、多様な内容の演題が集まりました。ナーシングサイエンスカフェでは、辻本八千代先生に聖バルナバ病院で開催されている思春期教室の一部を披露していただきました。看護職に関心のある高校生が人形を使って育児体験をしたり、妊婦体験ジャケットを着用して妊婦の腹部の重さを実感したりしました。

写真 7　ポスターセッション

多様なプログラムを組んだため、同時進行の企画もあり、参加された方から聞きたい講演や演題に行けなかったという声も多く聞かれました。事務局としては、すべての参加者に満足していただけるような学術集会を運営する難しさを痛感しました。

おわりに

学術集会は 1 日だけの開催でしたが、450 名の方にご参加いただけました。企画・運営に際しては、企画・実行委員、実行委員、実行協力員、学生ボランティアの方々のほか、武庫川女子大学職員の皆様から多大なご協力を賜りました。展示・広告、ランチョンセミナー協賛を通して、企業・団体の皆様からも多くのご支援を賜りました。心より感謝申し上げます。

本年 3 月 17 日には本学看護科学館にて、久米弥寿子教授を学術集会長として、第 31 回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会が開催されます。これまでの学術集会開催で培った「チーム武庫川」の力が遺憾なく発揮され、成功裏に終わることを祈念して、本稿を閉じます。

写真 8　企業展示

文献

青木恭子，森恵美，坂上明子，岩田裕子，前原邦江，土屋雅子，岡村実佳 . (2016).「高年初産婦に特化した子育て支援ガイドライン」の現場適用に向けた看護研修会 . 千葉大学大学院看護学研究科紀要，38, 57-61.

森恵美ら . (2014). 高年初産婦に特化した産後 1 か月までの子育て支援ガイドライン . http://www.n.chiba-u.jp/mamatasu/doc/guidelines_fix.pdf

心光世津子 . (2017). 第 15 回日本アディクション看護学会学術集会開催報告 . 武庫川女子大学看護学ジャーナル，2, 3-6.